

## 第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

### 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	かつやま子どもの村中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	地域の鉄道（えちぜん鉄道）をもとにした劇づくり

#### 〈活動・研究の意義および活動報告〉

##### 1. かつやま子どもの村小中学校

本校は、自己決定・個性化・体験学習を基本原則とした私立の小・中学校で、約90名の子どもたちが元気に活動している。寮が併設されており、遠方から通学している多くの子は寮生活を送っている。1週間の授業の半分ちかくがプロジェクトと呼ばれる体験学習で、子どもたちが自分で考えて、建物をつくったり、米や野菜を育てたり、本格的な陶芸窯をつくったり、地域研究の本を出版したりしている。子どもたちは、毎年自分の興味に合わせて、プロジェクト（クラス）を選ぶので、小中学校ともにそれぞれ異年齢の混ざった縦割りクラスである。

##### 2. 劇団バックス

かつやま子どもの村中学校のプロジェクト（クラス）の1つが、表現を中心に活動する「劇団バックス」である。毎年、ストレートプレイやミュージカルなど、60分を超える本格的な演劇の作品づくりに取り組んでいる。演じるだけでなく、大道具や小道具、衣装などの制作も中学生で分担しておこなう。これまでは既存の作品を元に活動することが多かったが、今年度は創作劇に挑戦した。つまり、「どんなストーリーにするのか」から、中学生が自分たちで考える劇づくりである。今年、劇団バックスを選んだ1～3年生の合計14人の中学生と担任の大人は、初めての取りくみに不安を抱きながらも、「どんな劇が創れるだろう」と、わくわくした気持ちで1年がスタートした。

##### 3. 劇づくりの始まり

とはいえ、何も無いところからアイデアは生まれにくい。そこで、物語づくりのきっかけになるよう、テーマに設定したのは、地元の「えちぜん鉄道」である。この鉄道は、ほとんどの中学生が毎週の登下校で利用しており馴染みが深い。いっぽうで、どんな歴史のある鉄道なのか、その沿線にはどんな場所や暮らしがあるのかなどを、中学生はあまり知らないだろう。身近にあり、登下校時に何気なく目にしている風景からつながる事柄は、中学生が興味をもちやすいと考えた。また、鉄道には異なる年齢、職業、生育歴、交友関係など、さまざまな人たちが乗車している。鉄道という空間で繰り広げられる人間模様を取り入れた演劇作品の創作を目指した。

さっそくどんな話にしたいか、どんな登場人物がいたらおもしろいかなど、アイデアを出し合った。そして、改めてどんな電車なのか注目するために、また、物語のもとを探すため、1日かけてえち鉄（えちぜん鉄道）に乗って旅を試みることにした。途中の駅で降りて周辺を散策したり、1駅間を歩いてみたり、ふだんは乗らない路線の終着駅まで行ってみたりした。いつもは何気なく乗っているえち鉄だが、車窓から見える景色や駅の様子、駅間の距離、乗客の様子や年齢層、座席の座り心地など、中学生たちには気づきが多くあったようである。

また、えち鉄の車両基地への見学にも行った。社員の方が仕事内容や車両の種類だけでなく、駅のしくみや電車による街の変化などを紹介してくれ、中学生の質問にもていねいに答えてくださった。安全への配慮や地域とのつながりを大事にしていることなど、社員や駅員、乗務員の方々の気持ちや企業の努力をたくさん学ぶ機会となった。この見学をきっかけに、えち鉄の歴史や鉄道にかんする調べものにも意欲的になった。年度の初めは「劇は好きだけど、正直、電車にはそんなに興味はないんだけど…」と言っていた人も、実際に見学をしたり、調べ物をして、少しずつ興味が出てきたようだ。

##### 4. 興味の広がり

どのような劇をつくりたいか、見学し、調べて話し合う中で、電車だけでなく、地域の暮らしや福井の歴史に



車両基地の見学

興味をもつようになった中学生もいた。しかし、メンバーの多くが県外から通学しており、劇の題材を得るためには福井についてもっと詳しく知る必要があると感じるようになった。そこで、福井市立郷土歴史博物館や一乗谷朝倉氏遺跡を訪れたり、郷土料理や方言、特産物、観光名所などについて調べたりして、鉄道だけでなく福井の歴史や暮らしについて学んだ。そして、見学を通して学芸員の方から第二次世界大戦時の福井空襲の話や、復元された戦国時代の町並みを実際に歩いて当時の人々の暮らしに思いを馳せたりして、これらの題材を「ぜひ劇に取り入れたい」という気持ちを強めたようだった。



一乗谷朝倉氏遺跡の見学

## 5. 脚本づくり

こうして調べて話し合い、出し合った物語のアイデアをもとに、2学期が始まるとみんなで脚本づくりに挑戦した。「こんな話にしよう」、「この設定がいい」など、わくわくした様子だったが、いざ実際に書き始めてみると、台詞を繋げながら話を展開していくのが思ったよりも難しく、書く手が止まり悩む様子が見られた。それでも苦勞して書き進め、「できた！」と嬉しそうな声が聞こえてきた。脚本づくりの大変さを感じると同時に、自分で創作する喜びを味わったようである。

「朝倉義景」「東尋坊」「廃線」「認知症」「コシヒカリ」など、題材もさまざまな物語が、全部で20本近く集まった。それらをすべて読み合わせし、気に入った場面や台詞、演じてみたい作品を出し合い、どの作品を選んで、実際に劇にしていくなかの話し合いをした。多くの作品が候補に上がったが、完成させるまでの残りの日数や上演時間の長さを考えると、さらに作品をしばっていかねばならなかった。「せつかくつくったのに…」と、なかなか決められず頭を抱える人も多かった。何日も話し合った結果、1つ15分～20分程度の小作品を5つ合わせた短編集として脚本をまとめることに決めた。選ばれた脚本は、「福井の未来」「福井県発祥のコシヒカリをめぐる騒動」「認知症のおばあちゃんが経験した福井空襲」「朝倉義景と景鏡の一乗谷への思い」「自分たちの劇づくりへの思い」である。これまで見学したり、調べたりして知った歴史や出来事を取り入れた話だ。それぞれとある電車に乗車したことがきっかけで、物語が展開する脚本になった。



創作した脚本の読み合わせ

## 6. 立ち稽古・舞台制作

配役も決まり、11月にはよいよ立ち稽古が始まった。どの中学生も演じることを楽しんでおり、いきいきとした表情で活動が進んだ。いっぽうで、台詞が聞こえない、表情や立ち振舞いが場面の雰囲気と合わない、動きが小さいなど、演技面でのそれぞれの課題も見つかった。自分たちで創作した劇であるため、参考にできる映像などの見本がなく、役づくりと演技に苦勞している人が多かった。自分の演じている様子を録画して見直したり、お互いの演技を見てアドバイスをし合ったり、自分の役についてじっくり考察したりして稽古を進めた。上達したいという気持ちが強く、各自が自発的に試行錯誤するうちに、表情が豊かになり、思いきった動きをするようになってきた。

それと同時に、大道具や小道具、衣装、音響など、劇作品をつくるうえで必要な仕事を分担し、その準備にも取りかかった。5つの作品はそれぞれ設定が違うので、用意したりつくったりするものがたくさんあり、立ち稽古と同様に時間のかかる大変な作業である。見通しの甘さから、計画どおりにいかないときもあったが、ほかの子に手伝いを求めたり、声を掛け合ったりして、クラス全体でうまくいくように協力しながら進めた。



立ち稽古

## 7. 中学生の成長

### ①総合的な発達（解放感、試行錯誤する態度、達成感、自信、社会性など）

演劇は、身体をいっぱい使っておこなう活動である。日々の立ち稽古で大きな声を出したり、思いきり演技したりして、爽快感や解放感を得た。また、少しずつできるようになっていく自分を実感し、自信につながっている。また、劇づくりという時間のかかる作業に、中学生一人ひとりがより良い演技を目指して主体的に試行錯誤をおこなった。思い通りにいかず問題に直面しても、ねばり強く考え、いろいろな解決方法を試した。さらに、演技の練習や舞台制作などで、みんなで協力する必要性や有用性を実感した。

### ②地域研究と興味関心の広がり（鉄道、地域の暮らし、文化、歴史、発展など）

地元の「えちぜん鉄道」を出発点として、交通の発達や地域の歴史、生活、地理、食文化、方言、エネルギー問題まで調べて、学んだ。実際に見学して、専門の方に話を聞く機会もあり、劇づくりを通して、中学生たちはさまざまな分野に興味関心を広げた。福井に対して、より愛着や親しみをもつきっかけにもなったと感じている。

## 8. 年度末の発表に向けて

年度末、そして発表の日まで、あと1週間となった。脚本づくり、立ち稽古、役づくり、舞台制作など、中学生一人ひとりが時間をかけておこなった取りくみが合わさり、ひとつの劇作品として完成した。中学生たちは、うまく演じられるか、自分たちの劇を観てお客さんがどんな反応をするのかなど不安もあるようだが、発表の日をとて楽しみにしている様子だ。担任の大人としても、中学生たちが5つのすべての作品を思いきり演じきり、達成感に満ちた晴れやかな表情で1年を終えることを、心から願っている。